

目的 老後の生活の充実は、中年期をいかに生きたかということと関係がある。定年まで勤め続ける女性は現状ではまだ少ないが、将来は増加すると予想される。これまでなされた研究では、ほとんどが男性の定年退職を問題にしている。しかし、職業が生活の中心を占めている男性と家事や子育てと両立させなければならない女性では、退職の受けとめ方や退職後の生活適応の問題は異なるのではないかと考えられる。定年まで勤め続ける女性が比較的多い職種として教師をとりあげ、仕事へのとりくみ方、勤め続けるうえでの困難、退職の受けとめ方、老後の生活と意識などを男性と比較しながら検討した。

方法 福岡県内居住の教員退職者のうち退職後10年以内という条件で、男女比4対6で1000人を選びだし、1992年11月に調査用紙を郵送した。712部回収したが、女性364人と男性279人(50歳以上で退職し勤続30年以上の者)を分析の対象とした。

結果 長い在職期間には男性でも何度かやめたいと思った者が多く、仕事からの引退を役割の喪失よりも解放と受けとめているが、生まれ変わっても教師になりたいという教職志向も強い。教職志向や仕事による達成感や退職時の年齢や勤続年数と関連があり、女性は男性以上に強く、退職後の生活満足度を規定する要因にもなっている。退職後は娯楽や学習だけでなく地域活動や奉仕活動を通して、男女とも社会参加や能力発揮に積極的である。信頼できる友人は仕事を通して得た場合が多く、男性以上に女性は親密な交際が続いている。老後の生活において活動性だけでなく自立意識も高い。女性の場合にはとくに、定年までの継続就労によって得られた経済力に支えられているといえる。